
最期ノ特攻

葛城純一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最期ノ特攻

【Nコード】

N1213B

【作者名】

葛城純一

【あらすじ】

太平洋戦争終結直後、人間魚雷“回天”を搭載した潜水艦が出撃する……死にゆく帝国海軍、最期の特攻隊の物語り

第1話：1945年8月15日（田辺克也）（前書き）

この作品はフィクションであって実在の人物や団体とは無関係です。

第1話…1945年8月15日（田辺克也）

—8月15日—

俺達は炎天下のなか、全ての作業を中断して基地の広場に整列させられていた。

—重大な放送がある—

ただそれだけを聞かされて。

そして正午、目の前のラジオから声が聞こえてきた。

『朕深く世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ、非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ、茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク……』

雑音混じりのラジオから聞こえてくる、妙に間延びしたようなイントネーションが特徴的な声。それは俺が—国民の大半がそうだったように—生まれて初めて聞いた天皇陛下のお声だった。

ひどい雑音と難しい言葉ばかりで完全には理解出来なかったが、足掛け十五年にも及ぶ戦争（＊1）が終わった、ただそれだけが何となく解った。

玉音放送（＊2）を聞いていた時、集められた連中は色んな反応を示した。

嗚咽を漏らし男泣きしているやつ

瞑目しているやつ
がつくりと肩を落としているやつ
ただ天を仰ぐやつ

そんななかで俺は特別な感慨もなく、ただ聞こえてくるラジオに目を向ける。

俺はもうあの“回天”に乗ることはないのだろう、ただそれだけを考えていた。

~~~~~

放送が終わり、ポツダム宣言（＊3）の内容がアナウンサーによって読み上げられると、俺達は解散させられた。

そして俺はその足で“回天”の格納庫へ向う。

特別な思いがあった訳ではない。ただ集合がかかった時に中断した整備の続きをするためだ。

もつとも、戦争が終わったのなら特攻（＊4）もなく、ほったらかしでも構わないのだろうか。

―“回天”―

それは衰えた勢いを盛り返すという意味をもつ。太平洋戦争末期に開発され、魚雷を改造した一人乗り特攻潜水艇。そして俺はそれに

高精度誘導装置として搭載される“特攻隊員”（＊5）だった。

格納庫の扉を開けるとすぐに明るい少女の声が耳に飛び込んでくる。

「おかえり、克ちゃん。重大な放送っていったい何だったの？」

「天皇陛下のラジオ放送があったんだ。日本が負けた、って」

「ふーん」

声は何の感慨もなさ気に相槌をうつ。まるでどうでもいい野球の試合結果を聞き流しているかのようだ。

「お前は悔しいとか何とか思わないのか？」

俺はいつものように棚に片付けていた工具箱を持ち、自分が搭乗し敵艦に突っ込む予定だった“回天”に歩み寄る。

「んー、別に何とも。克ちゃんだって似たり寄ったりなんでしょ？」

「まあ、そうだけど」

そう、俺も別に戦争の勝ち負けなんかどうでもよかった。

~~~~~

支那時変（＊6）が始まってすぐに親父は戦死、母は幼かった俺を

道連れに心中を図ったらしい。

伝聞形なのはその時のことを俺が詳しく覚えていないからだ。

脳裏に刻まれたのは不鮮明なイメージ。

揺らめく炎の熱さ

引き裂かれるような腹部の痛み

泣いているのか笑っているのか判らない母の顔

紅い血が滴る包丁

俺は焼け落ちる家から近所に駐在していた“憲兵さん”（＊７）に助け出され、一命を取り留める。

母は助からなかったそうだ。

あの時の俺は母に殺されかけたというトラウマから人間不信に陥り、誰とも口を利かず、眼に光りはなく、生きているのに死んでいるような状態だった。

そんな俺を“憲兵さん”は引き取る。

“憲兵さん”は妻と子どもを結核（＊８）で亡くし、俺と同じく独りだった。

優しい彼は実の父のように、俺を実の息子のように可愛がり育て、そして死んだ。

彼の妻や子どもと同じ結核だった。

“憲兵さん”のおかげで取り戻しつつあった俺の生きる気力は彼の

死で再び粉々に砕かれた。

その後、俺がどうやって軍に入隊し、どういった経緯で特攻隊員になったかはほとんど覚えていない。ただ世の流れに身を任せて流れ着いたのがここだ。

そんな世捨て人同然の俺にとって戦争の勝ち負けなんて本当にどうでもよかった。

~~~~~

台車に乗せられた“回天”に木製の梯子をかけ、上部ハッチから俺は内部に潜り込む。

内部は壁一面にパイプやケーブルが張り巡らされ、各所にバルブやメーターが配置してあった。ネジやボルト、バルブハンドルが緩んでいないか点検し、緩んでいれば締め直す。

「克ちゃんはこれからどうするつもり？」

「いろいろと処理があるだろうから暫くはこの基地にいる。そのあとは考えていないが、お前は どうする？」

聞いたところで仕方がないのは解っているが。

「私は自分の意思でどうこう出来る軀じゃないからね、克ちゃんの好きにして」



これが全く違う状況だったのなら、どれほど甘美な言葉だろうか。

だが俺は声の主を好きなようにする気はさらさらない。

「悪いがそれは出来ない相談だ。戦争が終わっても海軍は未だ健在。軍の“兵器”を好きなようにする権限は俺にはないんだよ」

俺がハッチから外に出て声の主を軽くスパナで叩いてやると軽い金属音と反応が返ってくる。

「痛っ。もし、克ちゃん、女の子は優しく扱うもんだよ！」

「誰が“女の子”だ。ほれ、整備終わったぞ」

「ん、ありがとね」

俺は梯子から降りると改めて声の主を見る。

全長15メートル、炸薬1.6トン、総重量8トン、耐圧深度80メートル、最大戦速30ノット、航続距離78キロメートル。

一度出撃すれば決して生還を帰すことのない鋼鉄の棺桶。

その名は――

人間魚雷“回天”

1945年8月15日（田辺克也）

注

- ＊1. 満州事変、日中戦争、太平洋戦争までの15年間（1931～1945）
- ＊2. 昭和天皇が肉声で全国民にむけ終戦を知らせた放送
- ＊3. 連合国（米英中ソ）が日本に対して提示した降伏条件。日本は8月14日にこれを受諾
- ＊4. 体当たり自爆攻撃
- ＊5. ここでは”菊水特攻隊”のことをさす
- ＊6. 日中戦争の当時の日本側の呼び方
- ＊7. 軍組織内の警察官
- ＊8. 伝染病。当時は抗生物質がなく、不治の病だった

## 第2話.. 1945年8月15日（佐山亮治）

— 8月15日 —

『堪エ難キヲ堪エ、忍ビ難キヲ忍ビ……』

枕もとのラジオから聞こえてくる天皇陛下のお言葉を私は真っ直ぐに受け止めることが出来なかった。

今、私の布団の周りには家族全員が集り、皆押し黙って静かに陛下のお声を拝聴している。

妻と年老いた母は深くうなだれ、国民学校（＊1）にあがったばかりの息子はこの異常な雰囲気飲まれ、オロオロと落ち着かない様子だ。

聞こえてくる音は、庭先でひと夏の命をまっとうせんと懸命に鳴く蟬の声、雑音混じりのラジオからの淡々とした陛下のお声、母の枯れたすすり泣く声、私が時折あげる呻き声。

ラジオから流れてくる大日本帝国の敗北、そしてポツダム宣言。

私は納得がいかなかった。帝国の勝利を信じ、あれだけ多くの戦友の命を捧げた戦争の結末が、このようなものだとなんて出来なかった。

放送が終了しても誰一人動こうとはしない。

暫く永遠とも思える沈黙が続くが、やがて妻が口を切りだす。

「貴方、これから私たちはいったいどうすればいいの……？」

勝ち気な妻にしては弱気な、そして色んな意味を含んだ言葉。

国が戦争に負け、国民はどうすればいいのか？そして、死にゆく夫に妻はどうすればよいのか？

玉音放送が始まる前、私は司令部（＊2）お抱えの軍医（＊3）から余命1ヶ月との宣告を下されたばかりだった。

~~~~~

伊号潜（＊4）の艦長だった私が肺結核を患って艦を降りたのは、硫黄島が陥落して（＊5）しばらくたった、4月の初めのことだった。

初めに自分に顕れた症状を、私は単なる風邪だと決めつけ、ほったらかしにしていた。

―帝国の一大事に風邪ごときで休んでなどいられるか―

実際戦況は日増しに、いや、分刻みで厳しくなっていた。

2月19日に硫黄島に米海兵隊が上陸、3月10日に東京大空襲（＊6）があり、それ以降全国各地で大空襲が続いている。

私は必死に軍務をこなし、血を吐いて倒れた。

長年の潜水艦勤務で肺を悪くしていた（＊７）せいだろうか、結核は瞬く間に進行し、私の軀を容赦なく蝕んだ。

疎開先（＊８）で私が倒れたと聞き付けた妻は、息子を連れて飛んで帰ってきた。

妻が私のために帰ってきてくれたことは堪らなく嬉しかった。

しかし：

—この町にも近いうちに空襲があるだろう—

私は懸命に説得して妻を追い返そうとした。

死が確定している私は空襲で死のうが構わなかったが、妻や息子だけはそんな目に遇って欲しくなかった。

しかし、お義父さんに似て頑固者の妻はそれを跳ね退る。

「結婚のときに『どんなことも“二人”で』って、あなたは誓ってくれたじゃないですか」

あの時と同じ彼女の微笑みに、私は折れざるをえなかった。

その後、町は何度か空襲にあったが、幸いにして私達は家も家族も無事でいることができた。

しかし帝国にも、私にも“死”は着実にせまっていた。

―艦を降りて間もなく沖繩に向かった戦艦大和（＊9）が沈んだ―

―再び血を吐いた―

―私の乗艦していた伊号潜が撃沈された―

―沖繩の守備隊が壊滅した（＊10）―

―40度を超える高熱が三日続いた―

―広島に、長崎に新型爆弾（＊11）が落とされた―

―そして、今日―

~~~~~

正座し、私の“答え”を待つ妻を目の端が捕らえる。母は相変わらずうつむき、視線を畳みに落としている。

私はむくりと布団から起き上がった。

その場の全員が驚き、目を丸くする。

私は思った以上に自分がしっかり立つことができ、満足する。そして壁に掛けてあった軍服へ、ゆっくりと歩み寄る。

真っ白な海軍第一種軍装（＊12）の詰め襟。

私は着ていた病服を脱ぎ捨て、長らく袖を通していない軍服に着替える。“少佐”の階級章が窓から差し込む日の光りをうけて煌めく。水漬く屍、草むす屍（＊13）となって多くの命が散った。上官が部下が、一般市民が。こんな“終わり”は絶対に認めない。

「あなた……」

長年連れ添った妻は私の意図する所を察したのだろう。その声の響きは引き留めるものではなかった。

「おそらく、これから先連合国軍が押し寄せて来るだろう……芳恵、もしもの時はわかつているな？」

妻は頷き、ブラウスのポケットから小さな白い紙包みを取り出す。中には自決用の青酸カリ（＊14）が入っているはずだ。

「母さん、馬鹿な息子をお許し下さい」

母は何も言わない。ただすすり泣く。

「慎司、母さんと婆さんを頼んだぞ」

息子の頭をくしゃりと撫でる。

彼はすぐさま立ち上がると姿勢をただし、私に挙手の礼（＊15）。

私は息子に返礼。

札を解くと改めて家族の姿を目に焼き付ける。

そして最後に、

「芳恵、ありがとう」

「……はい」

私は家族に背を向けると静かにその場を去った。

1945年8月15日（佐山亮治）

注

＊1. 現在の小学校にあたる学校

＊2. 軍隊や艦隊を統率・指揮する部署

＊3. 軍組織内の医者

＊4. 帝国海軍の潜水艦

＊5. 小笠原諸島南方に浮かぶ島。2万1千人の日本陸海軍の守備隊が護る硫黄島に米海兵隊6万1千人が上陸、激戦の末、硫黄島守



備隊は3月26日に玉碎

＊6．米B－29爆撃機344機による東京夜間爆撃。焼夷弾により下町を中心に40キロ平方メートルが焦土と化す。死者はおよそ10万人

＊7．当時の潜水艦は換気が悪く、淀んだ空気で肺を悪くしやすかった

＊8．空襲を逃れるために都市から地方へ避難すること

＊9．帝国海軍が誇った世界最大最強の戦艦。沖縄支援のために出撃し、米軍の航空攻撃によって4月7日に沈没

＊10．米軍が沖縄に上陸し一般市民も戦闘に巻き込まれる悲劇が起こった。6月23日に日本軍の組織的抵抗は終わるが、戦闘は9月7日まで続く。日本側の死者は18万人

＊11．原子爆弾の当時の呼び方。8月6日に広島に、9日に長崎に投下され、広島で20万人長崎で10万人の死者を出した

＊12．将校の軍服は三種類あり、そのうち一つ

＊13．海軍葬送曲“海ゆかば”の一節

『海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、顧みはせじ』

＊14．猛毒。米軍が上陸したとき婦女子は暴行を受けるとされ、自決用に所持する者が多かった

＊15．敬礼のこと

### 第3話：回想（田辺克也）

―8月22日―

俺はいつものように基地の外れの第二格納庫へと向かう。目的はあの回天に会うためだ。

ミンミンとうるさい蝉時雨の中を歩きながら、そういえばあの時はまだ蝉は鳴いていなかったなと、アイツと出会った時を思い返してみた。

~~~~~

本格的な夏を目前にして蝉が鳴きだす少し前。俺は兵員輸送の幌付きトラックに揺られながら回天の搭乗員訓練生の一人としてこの基地にやってきた。

トラックの中の訓練生は『お国のために』と特攻に身を切るような思いで志願してきた少年兵がほとんどで、皆表情は硬く、喋ったり話しをしている者はいない。

全員がなんとも形容しがたい雰囲気醸し出す中、普段通り無気力な様子の俺だけが場違いなくらい浮いていた。

基地に到着して基地司令官（＊1）の訓辞を受けたあと、俺達は訓練教官の先導によって活気のない町工場のような雰囲気放つ格納

庫へと連れてこられた。

「これが貴様達が乗る“○六金物”（＊2）、すなわち回天だ」

格納庫の大きな鉄扉が唸りをあげてゆっくり両側にスライドしてゆく。

――全員が息を飲んだ――

そして目に飛び込んできた物はレールに乗せられた何本もの魚雷。

「これ、が……？」

誰かが信じられないと呟くと、それが水面に投じた石となり、ざわめきの波紋が周囲に広がる。

そう、これこそが回天だった。

艦艇用魚雷（＊3）に潜望鏡（＊4）と操縦室、申し訳程度の操縦舵（＊5）を取り付けただけのあまりに粗末な造り……

急ごしらえの兵器なので当たり前といったら当たり前だった。そもそも回天は相次ぐ撃沈で搭載する潜水艦が無くなり、有り余って在庫となってしまった酸素魚雷（＊6）を改造したものなのだ。

生きようが死のうが構わないと考えていた俺ですら“これ”で死ぬのは御免だと思った。

自ら特攻を志願してきた他の訓練生がどれほどの衝撃を受けたのか

は想像もつかない。

ひとしきりざわめくと、やがて全員が毒気を抜かれた青い顔で呴いだ水面のように黙りこくってしまった。

その後、格納庫をあとに俺達は粗末な長屋兵舎（＊7）に案内され、そこで解散となった。

~~~~~

その日の夜、俺は昼間のせいかなかなか寝付くことが出来ずにいた。頭の中にこれから先のことが思い浮かび、想像を廻らせてしまう。

想像の中の俺は額に『報国』（＊8）と書かれた鉢巻きを絞め、土管の中のように薄暗くて窮屈な回天の操縦席に座っている

そして小さな潜望鏡を上げて海上を見ると、十字線の先に標的の敵空母（＊9）が浮かんでいた

俺は潜望鏡を下げ、操艇舵を操作して炸薬1・6トンの矢尻を空母へと向けると、弦を引き絞るようにスロットルを徐々に引き、スクリュウの回転数を上げてゆく

速度計の針が瞬く間に跳ね上がり、エンジンの爆音を艇内に轟かせ、回天は驀進する

そして大海翔ける矢のごとき回天は狙い違わず空母に突き刺さり……眼も眩む閃光が暗い艇内に満ち、意識が業火で熔けるように霧散してゆく……

いつの間にか汗をびっしょりとかき、俺は気分が悪かった。

外の空気が吸いたい。俺は夜の散歩に出かけることを思い立った。

誰も起こさないように、音を起さないように、静かに布団から這い出すと、硝子に紙テープが×印を描く窓（＊10）からこっそりと寝静まった兵舎を抜け出した。

~~~~~

俺は巡視兵（＊11）に会わないように注意しながら、当てもなく星空の下を歩きだす。

もし巡視兵に出くわしたのなら間違いなく脱走の容疑がかけられ、捕縛、独房にブチ込まれるだろう。

それだけなら別に構わない気もするが、精神注入棒（＊12）でめった叩きにされ、下手をすればその上で銃殺だ。

「そんな痛い目には合いたくないなあ」

大方の人間がそうであるように俺は痛いのが嫌いだ。いや、人の何倍也大嫌いだ。そして他人が痛がっている様子を見るのも嫌いだ。た。

「いつからだろうか？前は殴り合いの喧嘩なんかもよくやったのに」
そんなことを自問しているうちに俺はいつの間にか基地の隅の方ま

で歩いていた。

―やれやれ、今日は考え過ぎる日だったらしい―

そろそろ引き返すかと思った時、進行方向から明かりを持った巡視兵がこちらに向かって歩いて来るのが見えた。

どうやら巡視兵はまだ俺に気付いていない様子だったが、いずれ鉢合わせするかもしれない。

俺は近くの建物に忍び込みやり過ごすことにした。

~~~~~

「ここもか……」

うんざりと俺は呟く。俺が入ったこの建物もあの回天格納庫だった。

時間潰しにと俺は近くの白い線が数本書かれた回天のそばに寄ってしばらく観察してみる。しかし見れば見るほどただの魚雷にしか見え、うんざりが増すばかりだった。

俺はため息をつき、もう巡視兵が行った頃だろうと踵を返した時、

「ちょっと、そのキミ!!」

不意に背後から声をかけられた。

## 回想（田辺克也）

注

- \*1. 基地の最高責任者
- \*2. 回天は“〇六金物”（マルロクカナモノ）、“的”（テキ）などとも呼ばれた
- \*3. 軍艦に搭載される魚雷の総称
- \*4. 潜水艦や潜水艇（小さな潜水艦）に装備されている水中から水上を見る装置
- \*5. 水中で機動するための舵のこと
- \*6. 帝国海軍が開発した無雷跡魚雷。他国の魚雷を遙に越える高性能を誇った
- \*7. 兵隊が寝食をすごすところ。長屋状であったり“三角兵舎”と呼ばれる寝かせた三角柱状のものもある
- \*8. 『国に報いる』の意味。当時は七度生まれ変わっても国に尽くそうという風潮があった
- \*9. 航空母艦の略で、軍用飛行機を離発着出来るようにした軍艦。特攻はこの艦種を主な標的に定めた
- \*10. 空襲で硝子が割れても辺りに飛び散らないように当時は紙テープを貼り付けた
- \*11. 基地内を巡回し警戒に当たる兵
- \*12. 懲罰などに用いられるバットほどの太さ棒。木製や鉄製で、尻を打ち据える。ケツバットの原形

#### 第4話：回想（田辺克也）

俺は巡視兵に見つかったのかと飛び上がりそうになったが、どうも具合がおかしいことに気付いた。

巡視兵なら明かりで俺を照らしだすだろうし、『おい、その貴様！！』の台詞が飛んでくるはずだ。

「ねえ、聞こえてないの？」

俺は再び驚く。

よく聞けばこれは明らかに少女の声だ。基地に女の子などいるはずがないのに（＊1）。

俺は振り返ってその姿を探すが、それらしい影は全く見当たらない。

「一体どこにいる？」

「どこって、君の目の前だよ？あつ、ひよっとして君は耳と目が悪いのかな？」

悪戯っぽく響いた声だったが、是非ともそうであって欲しいと俺は切に思った。目も耳も異常ならこの現象にも納得がいくが、正常ならこれをどう受けとめればいいのか？

俺の目の前には少女ではなく回天があり、声はそこから発せられているのだ。

ひよっとしてこれは夢なのではないか？夢なら全て説明がつくじゃ



ないか。

痛いのは嫌だが、俺は頬を力任せに抓る。頼む、夢であってくれ。頬が鬱血して紫に変色し、これ以上続けられねじ切れるという寸前でやめた。

激痛がヒリヒリと頬を突き刺し、最後の希望は絶たれた。

現実だ。

目の前の不可解な事象全てが現実だった。

~~~~~

保けたように俺はその場に立ちつくす。現実感がひどく希薄になり、揺らぐ。

「……一体何なんだよ……」

「それはこっちの台詞だよ？こんな時間に人をじろじろなめ回すように見ておいて」

回天は批難の声をかけてきたが、

「まあいいや、久しぶりの話し相手だし」

あっさり方針転換したらしい。だが俺はまだ半ば放心混乱の状態であつた。

「……一体どういう事なんだ？……」

「ん？お話ししようって事だけど？」

違う。俺が尋きたいのはそのことじゃない。

——貴様は一体何なんだ？——

俺が口を開こうとした時、

「おい、貴様！！そこで何をしている！！」

俺は巡視兵の懐中電灯に照らし出された。

巡視兵が歩兵銃（＊２）を構え、入口から俺に向かってゆっくり歩いてくる。

黒光りする銃口が冷たい光りを放っていた。

~~~~~

巡視兵の乱入が俺の混乱に拍車をかけたのか、それから先の記憶はあやふやだ。

ただ覚えているのは、何故か巡視兵に咎められることはなく、『大丈夫だ。貴様はただ寝ぼけていただけだ』のような言葉をかけられたこと。

そして巡視兵が格納庫に鍵を掛けて去る時に、『“亡霊”め……』と呟いたことだけだ。

~~~~~

そんなことを思い出しているうちに、いつのまにか俺は格納庫の前まで来ていた。

いつものように、いつかのように鉄扉を開ける。

「克ちゃん、おはよう」

もう昼を回った頃だというのにコイツは朝の挨拶を俺に掛けてきた。

「今起きたのか？」

呆れ気味に尋ねると

「だって今日は朝から誰も来なかったんだもん。仕方ないでしょう？」

あれから7日たった今でも基地は慌ただしい。

間もなく占領軍（＊3）が来るらしく基地司令部は軍事機密書類（＊4）やらを処分するのに必死で、一般兵は雑務などに追われていた。

そんな忙しいなか、基地の隅にある忌み嫌われ、戦争が終わった今や顧みられることのない格納庫に好き好んで入るやつは、俺を除けば一人ぐらいなもんだった。

「じゃあまだ菅原は来てなかったのか」

——菅原慶一郎——

回天搭乗員訓練生としてこの基地にやってきた小心者の少年兵だ。

15日以降、奴も毎日ここにやってくる。しかし俺と違って奴はどうやら別の事情で来ているようだ。

『特攻に未練があるんじゃない？』

コイツの話しによると菅原は自分が乗る予定だった回天を朝晩二度、おっかなびつくり点検整備に来るらしい。

配線の一本一本を丹念に調べ、操艇舵の作動確認、ワイヤーに弛みはないか、ボルトの緩みはないか、スクリューの歪みはないか、潜望鏡に曇りはないか。

他の回天が放置されるなかで、奴の回天は今すぐにでも炸薬と燃料を詰めれば出撃できる状態にあった（＊5）。

「慶ちゃんとうとう諦めたのかな？」

「そうかもな」

その方がいい。俺は心中でそう思った。怖がりの菅原が何故特攻に執着するのはわからない。しかし諦めるべきなのではないだろうか？

その時、鉄扉が開いた。

「おっと、噂をすればってやつだね。慶ちゃん、こんにちはー!!」

「お、俺に話し掛けるなっていつも言ってるだろ!!」

怯えを含んだ怒鳴り声を上げたのは鉄扉の前の身の丈四尺八寸（＊6）ほどの小柄な少年兵、菅原だった。

「いつも“私”のために会いに来てくれてるんだからさ、挨拶の一つや二つしたっていいじゃない？」

「黙れよ!! いつもここに来ているのは、断じて貴様のためではないんだ!!」

根が小心である少年の足はガクガクと小刻みに震えている。

「だ、だいいち、“亡霊”なんて非科学的なものなんか、これっぽっちも信じているもんか!!」

俺は『“亡霊”に話し掛け返す時点でそれを認めたことになるのでは?』と思ったが口には出さない。今はとりあえず、

「まずは落ち着け菅原。一体なんの用なんだ？」

俺が声をかけると菅原は少し落ち着きを取り戻すが、“回天”への警戒は解いていない様子だ。狂犬のように飛び付いてくるわけでもあるまいに。

「田辺さん……司令が呼びです。自分と一緒に来て下さい」

俺は驚いた。この基地の長たる司令が肉弾（＊7）でしかない自分を呼び出すなどよほどのことが無ければ有り得ない。

「なあに？ 克ちゃんと慶ちゃん揃って軍紀違反（＊8）でもしちゃったの？」

「そんな訳ないだろ、阿呆」

軍紀違反などしていないつもりだ。もし違反していたとしても、司令が末端の兵を咎めるなど、悪戯鬼を校長が直々に叱るのは訳が違はずだ。

もしかすると俺と菅原は気付かずに相当な機密に触れてしまったのだろうか。だとすれば司令は機密書類と同様に処分する腹積もりなのかもしれない。

菅原がびくついていたのは、どうやら“回天”を前にしているからだけではなさそうだ。

「よし、わかった。行くとしよう」

俺は鉄扉に向かって歩き出す。

例えばどういふことであろうとも、命令に従うのが軍に身を置いた者の宿命だ。従わなければ……

「ん、それじゃ、いつてらっしゃーい」

呑気な“回天”の見送りを背に断頭台（＊9）に向かうような気持ちで格納庫を後にした。

回想（田辺克也）

注・

- ＊1. 当時は女性兵士（W A V E）は皆無で基地に女性がいることは一部の例外を除いてほぼなかった
- ＊2. ライフル銃のこと。ここでは三八年式歩兵銃
- ＊3. 連合国軍。主にアメリカ軍
- ＊4. 主に命令書や暗号帳など。機密書類の処分は司令官などが自宅に持ち帰り隠すこともあった。なのでごく稀に一般家庭から旧軍の兵器の設計図が発見される場合がある
- ＊5. 基地内や格納庫で爆発を起こさないようにするために、回天をはじめとする爆弾などは出撃直前まで信管や炸薬、燃料などを外していた
- ＊6. 当時、一般では尺貫法が用いられていた。4尺8寸は約145センチメートル
- ＊7. ここでは特攻兵の意
- ＊8. 軍の規律を軍紀という。言わば軍隊内の法律のようなもの
- ＊9. ギロチン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1213b/>

最期ノ特攻

2010年12月10日02時31分発行